
蟻との会話

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蟻との会話

【Nコード】

N95720

【作者名】

酒井 真言

【あらすじ】

孤独な生活を送る男は、部屋の中を歩く蟻を見つけて、その胸の内を打ち明ける。

—

十月初旬のある日の朝、一人の男が目を覚ました。秋の始まりを感じさせる寒さにおそわれ、六畳の和室はひんやりと静まっていた。坪庭の覗ける大きな窓からは明るい陽が射しこみ、塵を浮かびあがらせていた。

男はこきざみに目をこすり、汚れていない掛け布団の中で、仰向けのままぼんやりと天井を眺めていた。早朝の寒さが身に沁みて寝床から出られないわけではなく、日頃の習慣らしく頭が働いているようで、自分の体があることさえ気がついていないようすだ。

数分後、男はゆっくりと体を横に向けた。畳には一匹の小さなヒメアリが歩いており、精密機械のように触覚を上下左右に動かしていた。男はヒメアリに気がつき、じっと見つめた。

「ああ、おはよう、小アリさん、きみは朝っぱらだというのに元気に働いているね、……いや、じっさい元気かどうか知らない。立派に働いているようだなまけているのかもしれない。でも、つかれたようすもなくちょこまかと歩くすがたをみると、そんな気がしてしまうよ」

琥珀色をした胡麻粒ほどの大きさのヒメアリは、一定の速度で歩いていた。男は横顔を枕にあてたまま、小アリの動きを目で追った。

「ねえ、きみは眠れないことはあるかい？ いや、ないだろうな、

きみは虫だから考えることもできなければ、自分の行動をふりかえることさえできないだろう」

ヒメアリは敷布団しきふとんに近づいていた。男は坪庭ひらにわに目を向けた。

「働いているところ悪いんだけどさ、すこし話を聞いてくれないかい？ ベつにかまわないだろう？ この部屋ではきみが必要としているものはみつからないだろう、この部屋にいる時点で、迷子のようなものだからね。まあ、きみはそんなことに気がついちゃいないそれに、そんなことはどうだっていいだろうしね」

ヒメアリは動きを止めて、触覚を左右に振る。男は布団の中から両腕を出して、右肘で上半身を浮かせるように持ち上げ、左手で体を支えたまま、右肘を枕に立てて頬づえをついた。

「昨晚はなかなか寝つけなかった。昨日は、朝から京都市内を観光したというのね。ほら、この部屋に住んで一ヶ月経つというのに、嵐山以外はまるで観光していないからさ、……そういえば、昼下がりに伏見稲荷大社の竹林を歩いていたら、坊主頭のブラジル人の男に声をかけられたんだ。背が高く体格はがっちりしていて、有名なサッカー選手に似ていたよ。その男はタイに住んでいて、一ヶ月前から日本に来ていろいろらしく、九州と四国を観光したと言うんだ。それでその写真をみせてもらったんだ」

「三十分ぐらいしてさ、話を聞くのも飽きたからお礼を言って歩きはじめたんだ。すると、いったいなにを気に入ったのか知らないが、自分のうしろをついてくるんだ。ぼくが山の上まで歩くと言つと、ブラジル人は笑顔を浮かべて『自分も行くよ』みたいなことを言うんだ。……それから午後と一緒に行動するはめになったんだ。言葉がたいして通じないのね」

ヒメアリは敷布団に登り、前に進んだかとおもつと、動きを止めた。男は下目にヒメアリを見ていた。

「ほんとうは一人で観光したかったんだ。……ほら、だれかと一緒に行動すると互いの意見がぶつかり、自分の行きたい場所へ行くことができないことがあるだろう？ たとえ行くことができたとしても、それほど意味をもたない会話がじゃまをして、周囲への注意をそらしてしまい、景色をじゅうぶんに味わうことができなくなる。ぼくは観光しにきたのであって、観光名所でおしゃべりにきたわけじゃない。……くだらないおしゃべりをするのなら、観光名所じやなくて居酒屋にでも行くべきなんだ」

ヒメアリは敷布団のうえにおちている髪の毛のそばをころころしている。

「まあ、そんなことはどうだっていい、ただ、昨晚は心身ともに疲れていたんだ。それなのに、朝方ちかくまで寝つけなかったんだよ。今日は、朝からブラジル人と一緒に観光する、いや、おしゃべりをする約束をしてしまったというのに……、まったく、安易な返事をしてしまったよ」

ヒメアリは畳に向かって歩きだしていた。男は大きく息を吐いた。

「まあ、そんなこともどうだっていいんだ。寝つけなかったのもべつにイヤなわけじゃないし、むしろ、寝れないことが喜びでもあったんだから」

男は腹ばいになり、両肘を敷布団に立ててヒメアリを見下ろした。ヒメアリは精巧な体を動かしていた。

「きみには心から好きな人がいるかい？ いや、好きなアリか。…おそろくないだろう。しょせん虫だ、そんな感情は持ちあわせていないだろう。きみは働きアリかい？ もしかしたら、女王アリなら母性本能のかけらぐらいはあるかもしれないね。まあ、そんなきみに話してもわかるわけがないだろう…、でも、聞いてくれるかい？」

ヒメアリは畳の間にそって歩き、掛け布団から離れた。男は枕元にころがっているボールペンを手に取ると、小アリの進む先へそつと置いた。

「好きな人がいるんだ。ぼくは明日、その人と会う約束をしている。そのことが数日前から頭のなかを侵して、休まることない追憶と空想が繰り返されるんだよ。その人に初めて出会った瞬間の記憶から始まり、断片に散りばめられたその人とのふれあいの場面を、順々にではなく、手あたりしだいに浮かびあがらせるんだ」

ヒメアリはボールペンへ直進せず、斜めに歩いた。

「その人に初めて出会った当時のことは忘れもしない…、三年前、ぼくは名古屋で開催されていた“愛・地球博”内にあった飲食店の管理をしていた。知人からの誘われて、四月の末から働いていたんだ。それまでなにをするわけでもなく、ただなんとなく生活をしてきたから、気分転換になればと思っただけ」

「最初は慣れない土地のせいか、それとも内気な性格のせいか、戸惑ってばかりいた。今までにつきあったことのない若い学生ばかりで、職場の人間とどんな会話をしたらいいかわからず、どういった態度をとればいいのか悩んで、会話をすることを避けていたんだ。」

……けれど、三ヶ月もすると、しぜんと職場の人とは打ちとけた仲になり、頭で考えることなくスムーズに会話することができて、すっかり新しい環境に慣れていたんだ」

「初夏のころだったと思う。生活になじんできたころ、一人の女性と知りあった。その人はぼくの理想とする容姿ではなかったけれど、とにかく気が合った。自分をかざる必要がなく、自然体のまま接することができた。無理をしないのが何よりも楽なのだろうね。それから休みの日に二人きりで出かけたりするようになり、なんとも思っていないかった女性の献身的な態度が積み重なり、気がついてみれば、その人の愛情を鏡にうつすようにぼくはその女性を愛していたんだ」

ヒメアリはボールペンの先端から登り、ジグザクにボールペンのはらを歩く。

「その女性とつきあうことになり、仕事も順調にこなし、公私ともにうまくいっていた真夏の夜だった……、レジの清算に立ち会っため、閉店間際の店にかおを出すと、シフト管理を受けもっていた青年が、店の外に置いてある横長の冷凍庫にひじをつき、見たことのない女性と会話をしていた」

ヒメアリはボールペンのキャップから畳へ降りた。

「それが初めての出会いだった！ 首が長くほっそりとした体のあの人は、肩にかかる栗色の髪の毛をたらしたまま、やわらかい笑顔をぼくにむけた。白い顔はうっすらと化粧され、薄いピンク色の唇をしていた。丸っこくて小さな顔だけど、余分な肉はついておらず、あっさりした顔のパーツのなかでも、切れ長のやさしい眼が特に印象的だった。どんな会話をしたかは覚えていないけど、その時の映

像が鮮明にやきついてしまい、それからいくどもフラッシュバックさせられた。夜空には雲ひとつなく、外灯に羽虫がとびかう蒸し暑い夜だった」

男は掛け布団のそばにある手帳を左手に持ち、ヒメアリの前に置いた。ヒメアリは手帳の前で三秒ほど動きを止めると、すんなりと登りはじめた。それを見て、男はヒメアリが乗った手帳を敷布団のそばに置いた。

「その時、その人が新しいアルバイトだと知った。それからその人のことがなぜだか、気になってしかたがなかった。仕事を手伝うことになるので、さほど足をはこぶことのなかったその店にも頻繁にかおだすようになり、あの人のすがたを厨房で見つけては、仕事かなのにたわいもないことをおどけて話し、ソフトクリームやポップコーンを作る手伝いをした。キャラメルを通常の倍ちかく入れたポップコーンを作り、自分で食べるためにわざと客にだせないような形の悪いソフトクリームを作り、厨房でふざけあったりした。あの人と会話できること、ただの喜びを覚えながら」

「だからといって、あの人に恋心を抱いているとは思いませんでした。献身的な女性とのつきあいは何一つ不満なく、驚くほどうまくいっていたし、心から愛していたのも事実だった。それでも、職場の飲み会があれば、まっさきにあの人の前の席についた。“愛・地球博”内のパビリオンでパーティーがあれば、ビールを両手に持ってあの人のすがたをさがした。……そうそう、オーストラリア館のパーティーでもそうだった。酒で盛りあがり、仲間がいきおいで池に飛びこんだときも、つきあっている女性がそばにいたにもかかわらず、ひそかにあの人に自分の貴重品をわたしてから飛びこんだ。……でも、何もなかったんだ。あの人と接するだけでじゅうぶんだったから」

ヒメアリは均整のとれたとげのような足を素早く動かして歩き、再び掛け布団に降りようとした。

「やがて万博は閉幕を迎えた。ぼくは海外へ旅行に行くと、その人のことはしだいに忘れていった。旅行の最中になんとか連絡をとったことはあったけれど、万博当時のような盛りあがりはなく、遠く離れた友人に近況を報告するていどのものだった」

「そして日本に戻り、ペンキ屋で働きはじめると、忙しい仕事にあって、あの人のことを思いだすことはすっかりなくなってしまう。そんな生活がつづき、一年が経とうとしていた三月の暖かい日、ぼくはインドのゴアでおぼえたアシッド（LSD）を朝から使用したんだ。アシッドは自分にとってどういう関係なのか見極めたくてさ、そのころは毎週休みがくるたびにためしていたんだ。……きみ、アシッドを使用したことがあるかい？ あれは使い方によっては非常に有効な代物だよ。ぼくの知った人間の多くは野外パーティーで使うことが多いけれど、あんなうるさいところで使用するのはいらない！ 気持ちよく踊るために使う？ それはそれで楽しいけど、そんなのはただの原始的快楽者でしかなく、獣のようなものじゃないか。ぼくは人間だからね、きみにはない思考する能力を使いたいんだ。踊るのも好きだけど、ぼんやりと景色を眺めて、空想にふけるほうが好きなんだ」

ヒメアリは敷布団に登り、枕元に近づいた。男は掛け布団をはねのけて、胡坐あぐらをかいてヒメアリを見下ろした。

「その日は春を感じさせる陽気だった。……ぼくは働いていたペンキ屋が借りているコンテナのなかでアシッドを食べて、一人で絵を描いていたんだ。ほら、アシッドを使用すると、突然映像がとびこんでくることがあるだろう？ イメージはより鮮明に、稲妻のよう

にはつきりとのこり、あふれだすように筆がすすむんだ。それは絵を描く者にとつたら邪道かもしれないけど、自分で楽しむだけなら誰にも文句を言われることではないからね。アシッドと絵画との相性は恐ろしく良い。きみも機会があったらためしてごらん？ ぼくは美術館へ行くことをおすすめるよ。アシッドを食べてムンクの『マドンナ』を見たときは壮絶だったよ……、ただ、あまりの巨大量にふれてしまい、神経をいためないように気をつけるんだよ。そして、あまり拳動不審にならず、出口を間違えないようにね」

ヒメアリは枕に曲線を描いて歩いていった。

「いやいや、そんなことはどうでもいいんだ！ 肝心なのは、アシッドを使うとニュートラルに戻ることなんだ。ぼくはアジアを放浪していたからわかるけど、忙しい日本の社会で生活していると周囲の環境にのみこまれ、大切なことを忘れてしまうんだ。自分がなぜ働くか考えることもなく、ただ、強迫観念につき動かされるようになってしまふんだ。そんな状態で生活していると汚れがたまっている。精神への汚れとでもいうのかな、休まることなく神経を使っているせいで、擦れたかしょに汚れがこびりつき、在るべき人間としての感覚を失ってしまう。そうになると、目の前のことばかりにとらわれてしまい、せまくなつた視野では大切なことが見えなくなるんだ。ちなみに大切なことを説明するのは難しいから、『バガボンド』にでてくる“沢庵坊”の話を参考にしてほしい。“沢庵坊”といつても、“武蔵”が七十人斬りしたあとにでてくる“沢庵坊”だよ、……でも、きみはマンガを読めないか……、まあ、いや。でも、視野がせまくなるのは社会で生活しているかぎり、しかたがないことなんだろうね。だから、アシッドを使って神経の汚れを洗いながす必要があるんだ。アシッドはいわば、死を身近に感じることで、死にちかづくことで、普段見慣れてしまったものは新鮮さをとりもどし、存在することのありがたみを実感するんだ。他の人はどうか

知らないけど、ぼくはアシッドをそう解釈している。……それにしても、きみを見ているとアシッドは必要ないだろうね、汚れることがなさそうだもんね。まったく人間ときたら……」

ヒメアリは枕の端をこびりつくように歩いていた。

「それはともかく、絵を描くのに飽きたあと、アスファルトに腰をおろし、背中をコンテナにもたせて雲を眺めていたんだ。小さな山の頂にコンテナがあつて、ちかくにはTBSのスタジオがあるけど、自然が残っているところでさ、周囲は梅林がひろがり、はだかの木々に淡紅色が点々としていて、牧歌的な雰囲気がただよっていた。かすかに肌をやきつける陽射しがコンテナとアスファルトを温め、草花の香りをふくんだ風がとてもこちよかった。そのあたりの土地でもっとも景色が広い場所にコンテナはあつたんだ」

ヒメアリは再び枕の裏へ移動した。男はゆっくりと枕をひっくりかえした。

「活き活きとした色の映えた景色にかこまれ、青い空に浮かぶ白い雲の変化を眺めていると、突然あの人の顔が脳裏に浮かんだった。……すると、急になんともいえない気持ちがおそってきて、胸が苦しくなつたんだ。そしてすぐに、はつきりと気がついた、（ぼくはあの人が好きなんだ！）。顔はほころび、生きているのがとても幸せに感じたよ。手塚マンガのキャラクターみたいに、光に風、雲、草木、動物に語りかけたよ。……ところが、もう一度あの人を想うと、うれしさと悲しさが同時におそってきて、なんともせつなくなつたんだ。人間の感情は複雑なもので、原色を混ぜあわせてまったく別の色を表すように、ことなる楽器の音色・音階をあわせて和音が響くように、さまざまな感情が重なり、ある特殊な感情が生みだされるんだ。それは、あの人を想うことでしか生みだされ

ない、たった一つの感情なんだ。

男は再び枕をひっくり返した。

「それからだよ、あの人のことを想うようになったのは。ぼくはあの人が好きだ。けど、あの人を手にいれたいとは思わなかった。仕事が理不尽に忙しい時や、何事もうまくいかなくて嫌になった時もあの人を想い、長い人生の合間の息抜きである休息を、誰にも知られることなく、ひそかに味わっていたんだ。……それでよかったんだ、たまに夢に現れて、心を騒がすこともあったけど、ぼくはそれを、その感情を愛していたんだ、（あの人がこの世に存在している！）それだけでじゅうぶんだっただ」

ヒメアリは枕から降りて右の前足を浮かせると、触覚を左右に振った。

「ところが約一ヶ月前、仕事を辞めて今の部屋に移り住んでから、あの人はひんぱんに夢に現れるようになった。夢を見た日の朝は、ふわふわと浮いた幸福感がただよい、夢うつつにあの人の記憶をかみしめて味わった。あの人は黒と白のボーダー柄の長袖のシャツを着て、細い両腕を曲げて、紺色のハット帽をおさえて笑っているんだ。……んっ？」

布団の上の黒い携帯電話が震えたのを見て、男はいやらしく顔をしかめると、素早く手に取ってその動きを止めた。

「仕事をしていたころは、あの人への恋慕がまるで特效薬のように、生活を安定させていたんだけど、やるべき義務のない以前よりも自由な生活ではね……、麻薬のようにじわりじわりと心を侵していったんだ。ほら、今は考える時間がたっぷりあるだろう？ あの人を

想ってばかりいると、それが身近な習慣になってしまっただ。きみ、大麻を日頃から吸っていたらわかると思うけど、朝から晩まで吸っていると、効きがずいぶんと弱まるんだ。ひさしぶりに吸ったときのようにすーっと体に染みいることはなく、いくら吸ってもわずかに感覚が変化するだけで、頭は常に重く、意識がはつきりせず、体は泥の中を動いているかのようなんだ。それでもやめられない。あればある分だけ空気同様に吸ってしまう。まさに悪循環さ」

ヒメアリは畳を歩いては動きを止め、再び歩いては動きを止め、同じ動作を繰り返していった。

「耐性っていうのはある意味では厄介なものだよ。それがなければいつも新鮮でいられるのにね。でも、耐性から逃れることはできないし……、そうそう、大麻に慣れてしまった場合どう思う？ 人によってパターンはいろいろあるだろうけど、自分の場合は酒を合わせて気分を変えようとするんだ。もちろん、そんな時は大麻を吸う一回の量が通常の倍ちかくに増えているよ。ところが、酒を飲んだってただの気休めにもならず、根本の解決にはならない。またすぐに満たされなくなる。結局、おなじことなんだ。……だから、追いこまれたねずみのように、考え方を変える必要に迫られる。（大麻が手元にあるから吸ってしまう、なら、大麻を手元からなくしてしまえ！）それから吸うペースは急激に上昇曲線を描く。むだとわかっていながらも、坊さんの苦行のように吸うんだ」

「それといっしょで、あの人への追憶もひんぱんに繰り返えされるよね……、飽き足らず、さらに欲しくなるんだよ。いつもおなじ記憶ではもの足りないから、新鮮な記憶が欲しくなってしまう。たまにふたを開けて楽しむぐらいならこうはならないのに、感情への欲求はそううまくいかない。胸の内にはあの人を想う感情が大胆に座を占めてしまい、熱さと冷やかさを持って自分をさらにかりたて

るんだ」

「あの人に会おう！ そう思いはじめたころ、タイミングよく万博当時の同僚と飲む機会にめぐまれたんだ。（あの人に会えるチャンスだ！ これは神様からの贈りものだ！）ぼくは思ったよ、あの人の連絡先をうしなっていたから、その場であの人に会えるかもしれないと喜んだよ」

小アリは歩き、布団から離れてしまう。

「それで先月末名古屋へ行き、飲み会に参加した。期待していたあの人はいなかった。でも、それでかまわないとも思っていた。いれば最高だったけど、そこまでは望んでいなかった。ひさしぶりの再会が飲み場では味気あじけなかっただろうし、それに同僚との再会を純粹に楽しみたかったしね。なにせ、あの人の連絡先を手にいれればよかったんだから……」

「それで次の日の昼前、心臓の音にせかされて、手に入れた番号に電話をかけたんだ。電話にでなかったらどうしようと思っただけど、それからさきのことにはなにも考えていなかった。七コールぐらいしてからだろうか、あの人は電話に出たんだ！ それはもう歓喜そのもだよ！ 小川のせせらぎのように流れるあの人の口調は以前と変わらず、気品とゆとりを秘めていて、切れ長でやさしい眼が頭に浮かんだ。馬鹿なことに、ぼくはあの人の声を聞いただけですっかり舞いあがってしまった。前日の飲み会のことをだしにして、自分の気持ちを悟られないよう、おどけた調子でその日に会えるか聞いてみた。……つごうが悪いらしく、断られてしまった。まあ、それでも良かったんだ。声を聞けただけで、ぼくは幸福の絶頂（電話はつながった、会う機会はいつでもつくれることができるぞ！）だったんだから。電話で声が聞けた、そのことがなによりもうれしかった。

長話をしたいところだったけど、その日はそれ以上望むことはなかったからすぐに電話を切った。そして、ぼくは持っていた傘をふりまわして、どんよりとした灰色の空と無機質なビルに囲まれた錦の街を軽快に歩き、名古屋駅へ向かったんだ」

ヒメアリは六畳間の片隅に置かれた十四インチのテレビに近づいていた。男は携帯電話を開くと、首をわずかに傾げたまま、憎らしげに画面をながめた。骨ばって痩せた腰を重そうに上げて立ちあがり、坪庭の覗く窓に近づいて、そつと窓を開いて顔をしかめた。

「まったく、昨日同様、今日も天気がよさそうだ。明日あの人に会えるというのに、なんでブラジル人と観光する約束なんてしてしまっただらう？ 一人でもの思いにふけながら観光できればいいのに、言葉もろくに通じない人間に気をつかって一日を過ごすなんて……、まったく、自分を汚すようなものだ。それに、こんな気持ちでは相手にも失礼になるだろう……、でも、短い滞在の旅行者との出会いを大切に、相手の思い出に色をそえてあげたいと思ってしまったんだ。（ほんとうは一人で観光するのが好きなんだ。……もうしわけないけど、あなたとは一緒に観光できない）はつきりと言えば良かった。これだから遠慮がちな日本人の気質が嫌になる！ けれど、くつたくなかない笑顔の、大きく澄んだ眼を見ると、そんなことは言えない。それに上手に断る言葉をもっていないし、奴隷気質なぼくには、そんな勇氣はない。まったく！」

男は振り返り、眉間に皺しわを寄せて細い眼でヒメアリをちらっと見下ろし、押入れの扉を横に開いた。水色の半袖シャツを手に取って着がえた。色あせたジーンズの裏ポケットに札を入れ、長い髪をかきあげて黒の鳥打帽ハンチングをかぶり、腰を屈かがめて布団の上の携帯電話を手にとった。ヒメアリはテレビ台を登っていた。

「小アリさん、きみは考えることができないだろう。……ぼくは、それがうらやましくもあるし、かわいそうだとも思う。けれど、きみはしょせんアリだ。……さようなら」

男はドアを開けて、部屋の外へ出た。ヒメアリは触覚をまわすように動かしつつ、精密機械の体はテレビ台を一定の速度で移動した。

二

昼間の暖かい風は冷たさを取り戻すと、坪庭は次第に影に覆われて、射し込んでいた光は赤みを帯びた。部屋の空気を吸いこんでドアが開かれ、口元を緩ませた細い体の男が入って来た。男はジーンズの左ポケットから小銭を取り出して、簡素な黒い机の上に積み重ねて置くと、大窓に近づいて上方を見上げた。窓ガラスと障子戸を閉め、部屋の灯を点けた後、携帯電話を布団に放り投げて横になった。

「あああ、疲れた……」男は顔を枕に埋めたまま、確かめるように、大きく、静かに、ゆっくりと呼吸をした。

数分後、男は顔を持ち上げて体の向きを変えると、畳の上に一匹の小さなアメイロアリを見つけた。

「ああ、小アリさん、きみはまだこの部屋の中をさまよっていたのかい？ すっかり迷子になってしまったようだね。……ん、おや？ 朝の小アリよりも体が大きいぞ、ひよつとしたら別のアリかな？ そうかもな、週に二回は見かけるし、一昨日も見かけたもんない……、もしかしたら、この部屋はアリ達のテリトリーなのかもしれない。まあいいや、せっかく出会ったのだから、ぼくの話聞いてくれるかい？ 今朝、きみの仲間は聞いてくれたんだ、かまわないだろうっ？」

淡茶色のアメイロアリは、大空の遠くに見える飛行機のように歩

いていた。

「やっぱり、よほど気の合う人以外とは一緒に観光しちやだめだね。足なみがそろわないというか、ペースが合わないというか……、ささいな行動のずれが重なって、神経は痛んでしまふよ。もし誰かしらと観光することになったら、あれだね、理想は二時間だけど、四時間が限度だろう。でも、気の合う人だったら何時間一緒にいても、てんで苦にならないんだろうな……、」男は素早く体を起こし、胡坐くまをかいた。

「朝、ブラジル人と合流して、銀閣寺のそばにある哲学の道へ向かったんだ。というのは、昨日ブラジル人と話していて、その場所をおすすめしてくれたからだ。ほら、ぼくは京都の観光が足りていないだろう？ だから、口コミを信用して、早朝から一人で向かう予定だったんだ。きみ、観光をぞんぶんに楽しめる時間帯って知ってるかい？ それは早朝と日暮れさ。その時間帯は人がめつぼう少ないから、喧騒に気をとられることなく、静かに場を味わうことができるんだ。それなのに、一緒に行こうと誘うブラジル人の言葉を安受けあいしてしまったから……」

「それで、丸田町通を自転車で走っていたんだ。五分ぐらいするとブラジル人の乗っていた自転車から金切り声がなりだしてね、『こののが重い！』と言うんだ。原因がわからないブラジル人のかわりにしらべてみると、右のブレーキが“ききっぱなし”の状態だった。それで、そのままじゃ今日の観光に支障がでるから、自転車を借りた店まで戻ることになったんだよ」

男はメモ帳を手に取り、アメイロアリの前に近づけた。アメイロアリは止まり、体の向きを変えて歩きだした。

「それぐらいならべつにかまわない。寝不足とあの人への想いで頭はかたまっていたから、自転車をこいでいるのが楽だった。……それが、店に近づいたところで、ブラジル人はこんなようなことを言いだしたんだ。『昨日の疲れがのこっていて、自転車をこぐのがつらい。哲学の道ではなく、電車に乗って鞍馬山へ行かないか？』ねえ、きみ、ぼくはどう考えたと思う？ こう考えたんだ（ああ、それならけっこう、鞍馬山へ行きたいのなら、ぼくにかまわないで行ってくれよ。ぼくはぼくで哲学の道へ行くからだいじょうぶさ。無理して一緒に行動する必要はないから、お互いの意志を尊重して、自分の行きたいところへ行こう。だから、気にせず鞍馬山へ行ってくれ）。今日の夕方までブラジル人と過ごすことを覚悟していたから、こんなに早い時間から解放されるとは思ってもみなかった。ぼくはブラジル人の言葉に喜んで、こう答えたよ『ぼくは哲学の道へ行くよ』とね」

男は手帳を再びアメイロアリの前へ置いた。今度は先ほどよりも間隔が空いていた。

「そうしたらさ、ブラジル人はどうしたと思う？ 遠くを見つめだしてさ、焦点を変えずに真剣に考えこむんだ。そして、眉間にしわをよせたまま力のない声で、『わかった、哲学の道へ行こう』と言うんだ。奈落へ突き落とされた気分だった。陽の光でしょぼしょぼとしていた眼はさらに閉じてしまい、思わずうすら笑いをうかべてしまったよ。ぼくは疑問に思った（なんでこの男と一緒に行動したがるんだ？ 自分の希望をまげてまで行動を共にしようとするんだ？ ぼくと一緒に哲学の道へ行きたいと言ったから？ いや、そんなことは一度だって口にしていない。……じゃあ、なぜ？）。

アメイロアリはメモ帳の上を歩いていた。男はメモ帳をそっとつかみ、眼前に持ち上げた。

「空気が澄んでいたんだろう、空は数日見たことのない青一色がひろがっていた。けれども、つきぬけるような空でさえ、ぼくの心はそれほど動かされなかった。自分から会話をする気はさらにうせてしまい、考えることもイヤになってしまった。それに、腹のなかのぽっかりあいた球のようなものが、あいかわらず全身の力を吸いつづけていた。あの人に会いたくてしかたがなかった……」

アメイロアリはメモ帳の上で静止した。

「それからの自分は、もう、ただのマリオネットだよ。自分の希望をつたえることはなく、ひたすら相手の行動にあわせるだけさ。朝、ブラジル人に会う前はこう決めていたんだ。最近読んだ本の影響だろうね、隣人を愛せよ、だっけかな？ でも、本で得た付け焼き刃の知識はもろいもんだ。ブラジル人と一緒にいてそんな気持ちは片隅にもなかった。あるのは汚されていく自分の心とあの人への想い、それから空虚感だ。ぼくは自分を殺しきれないまま、時間が早く過ぎてブラジル人が疲れるのを待っていたんだ」

男は手に持っていたメモ帳を下げて、アメイロアリをじっと見つめる。

「楽しみにしていた哲学の道は、自転車で通りすぎるだけ。そのあとは近辺の寺をまわった。ブラジル人は墓地を見ては、大きく眼を開いて美しいと喜び、寺の中に入っては、畳の上であぐらをかき、正座をしている周囲の人を気にせずに瞑想をはじめた。昼食ではスーパーマーケットで買った高菜漬けを、ワンパックすべて食べつくす勢いのくせに、ほんのわずかの残りをぼくにすすめて、片付けさせようとするんだ。昨日の食事の時もそうだった。あじフライもごぼうサラダも、ペットボトルのお茶もそうだ、かならずぼくに後始

末をさせるんだ。それも食事の容器ならまだしも、ぼくが買っていないペットボトルの容器もだ！」

「ぼくは食べ残すのが嫌いだし、そんなことでもめたくないから我慢していたが、自分の買った飲食物の処理を人に任せるのはおかしいと思った。ブラジル人はベジタリアンだと言っていたが、ぼくからみたらえせベジタリアンだ。いやしく肉を食べる人でも、最後まで自分で食べきる人のほうがよっぽど立派じゃないか。その男は自分で、仏教徒だと言っていた。よほど日本が好きなのだろうが、ぼくには食べ放題の店で分別なく食い荒らすくせに、食べ残しをする奇怪な男にしか思えなかった。ブラジル人は、どこか盲信的なところがあつた……」

「そして昼さがり、ブラジル人が日本の曲が欲しいと言いだしから、川原町のタワーレコードへ行つた。『おすすめ之歌謡曲はないか？』と聞いてくるから、“美空ひばり”のベストをすすめたんだ。それなのに、ブラジル人はそれを拒否して、店で一時間ほど選んだ結果、買ったのは“ノラ・ジョーンズ”だ！日本の歌謡曲どころか、世界中のどこでも買えそうな海外のジャズを買っているじゃないか！ いったいぼくの待つた一時間はなんだったんだろうか？ さすがにぼくはブラジル人と一緒にいることが我慢できなくなり、役目は済んだと思うことにして、『疲れたから帰る』と言つた。ブラジル人は『寺町で買い物があったいんだ』みたいなのを言っていたが、そんなことはぼくにとってどうでもよかつた。そんなくだらないことに大切な時間をつぶしたくないから、えせ仏教徒のブラジル人と別れたんだ」

アメイロアリはメモ帳の裏へ移動していた。男はメモ帳をひっくり返した。

「きみはどう思う？　ぼくはあのブラジル人が途中から“寄生獣”に見えてしかたがなかった。“寄生獣”といっても、岩明均のマンガ『寄生獣』じゃないよ、ぼくが考える意味での“寄生獣”だ。それは、一人で行動することができず、必要以上に他人に依存して生きていく人間のことだ。相手のことなんてどうだっていい、相手が消耗しようがそんなことはいっこうにおかまいなしだ。いつもだれかしらとむすびついていないと生きていけない、そんな貧弱な人間のことだ。……けれど、あのブラジル人は一人で旅をしているから、じっさいは“寄生獣”じゃないだろう、それなのに、ぼくとむすびつつこうとしていた。自分の希望をまげてまで、哲学の道へ一緒に行こうとしたのがなよりの証拠だ。……でも、きみはアリだ。理解できないだろう。集団があつてこそ、きみはなりたっているんだからね……」

「でも、遠い視点で見たらぼくもきみなんだよ……、いや、そんなことはどうだっていい。ぼくはもうあのブラジル人から解放されて、自分をとりもどした。そして明日までの予定は今はない。あとはあの人と会える時を待つのみだ」

男は柔らかい動作で手帳を畳に置くと、倒れるように仰向けになり、力を抜いて眼を閉じた。

「それにしても今日は疲れた。……でも、明日だ！　そう、やっとあの人に会えるんだ！　ようやくぼくの心は救われるんだ！」

アメイロアリはメモ帳から降りて、畳を移動していた。男は力なく寝息をたてはじめた。

陽は沈んでいた。隣の部屋の住人が外灯を点けて、坪庭は柿色に染まっている。数枚の葉と共に梢の影が障子にうつしだされていた。部屋は冷たく、静けさに包まれていた。

男ははつと目を覚まし、頭を二三度横に振って上半身を起こすと、頭を垂れたまま体を動かさずに遠くを眺めた。ころがっていた携帯電話の青い点滅が視界に入ると、けだるそうに腕を伸ばした。親指をはじいて画面を開き、その親指を数回動かしたあと、動きを止めた。顔の筋肉をピクリとも動かさず、機械のように規則正しく呼吸としては、携帯の画面をただ見つめていた。眼をかすかに細くすると、左手で地面を押して立ちあがり、黒い机の前のイスに腰かけ、頬杖をついて再び携帯の画面を見つめた。顔はお面のようにかたまつたまま、ときたま大きく息を吸っては吐き、親指で携帯電話のキーを操作し続けた。

机の上に置かれた日本酒の紙パックをわしづかみ、赤いキャップを回して空のコップに注ぎ込んだ。コップを口につけ、喉元を二回動かし、男は再び携帯電話のキーを操作した。

素早く操作していると、急に動きが止まり、コップに手を伸ばしては再び動きはじめる。そんな動作を数回繰り返かえした。

三十分ほど経つと、男は携帯電話の画面を閉じ、背にもたれ、首を傾げたまま眼を見開き、しなびた溜息をついた。

「アリスさん……、きみはこの部屋にいるかい？」

男はイスを半回転させて部屋を見わたした。窓に近い隅に、琥珀こはく色した胡麻粒ごましほどの小アリを見つけた。小アリは動いているのかはつきりしない速さで、畳と畳の間を歩いていた。

「ああ！ 小アリスさん！」

男は机の上から紙きれを取り、小アリに近づいてそつと置いた。小アリは進路を変えずに、なんの警戒もなく紙きれをよじ登った。男は口元と眼元を緩ゆるめると、紙きれを持ってイスに腰かけ、机に置いた。

「嫌な予感はあるものだね。考えないようにしていた出来事が現実
に起こってしまったよ。……残念なことに、あの人は、明日会えないんだってさ、まったく、笑っちゃうよ……」

「でもさ、それほど悲しくないんだ。なんでだろう、あの人からのメールの文章を見た時、ただの文章に見えたんだ。文章の意味がわかっていて、うまくつかめなかったのかな、（明日は会えないんだ、ああ、そう）それぐらいにしか思わなかったよ。もしかしたら、無意識のうちにこの出来事を予感していたのかな？ ほら、格闘技の試合を観戦していてさ、八百長の試合だと自分は知っていて、その勝敗も知っているんだ。もっとも、まわりの観客はそれを知らないから、自分も知らないふりをして一緒に騒ぐんだけど、見た目につつまる盛りあがりとは裏腹に、真相を知っているから心はひややかなんだ」

男は物憂ものうげに溜息をついた。小アリはらくがき帳のうえを歩いて

いた。

「いや、違う！ ぜんぜん違う！ そんなんじゃない！ 答えを教えられているクイズ番組に出ているようなものだ。……違う！ それも違う！ ……本当は、本当はいつ断られるのかと、いつも怯えていたんだ。……あの人に会えることがうれしくて、その反面、断られることが死ぬことのように恐ろしくて、見ないようにしていたんだ……」

「でも、見ないわけにはいかない。いくら怖くても、ぼくには眼をそらすことが許されず、嫌でもそちらを見てしまうんだ。正直言うと、会えることを喜んでいたくせに、会えないものだど覚悟していたんだ！ マリオネットに微笑みの仮面をかぶらせて、うしろから見えない糸で操り、不器用な喜びのダンスを踊らせていたんだよ！ ああ、でも、糸は切れてしまった。……もう、踊ることはできないんだ……」

男は眉をひそめて口をかたくむすび、頬に気味悪い皺しわを寄せた。小アリはらくがき帳の上で片足をあげて止まり、触覚はくるくると動いていた。

「だってさ！ 四日前に電話で会う約束をした時、あの人の淡々とした声は以前のような清潔さはなく、ぬめりをもっているかのよう
に受け答えがはつきりとしらないんだ。生氣はなく、『明日会える？』
と聞いても、『んー、明日か……、明日ね……、明日は仕事だから
な……、それに友達と会う約束をしているし……』とあいまいな返
事をするんだ。それで、ぼくが『明後日は？』、『その次の日は？』
と聞いても、たいしたことのない理由で断るんだ。ぼくは思った（
言葉をのばしてはつきりしないのは、会おうとする意思がないんだ）
。だってさ、『一時間でいいから』とたずねても、どうも煮えきら

ないんだよ？ 返答が遅れるのは予定が入っているからじゃない、予定を入れようとしているからなんだ。三日間は合計で七十二時間だろう？ そのうちのたった一時間も用意できないっておかしいじゃないか？ よほどのワーカーホリックの人でないかぎり、だれにだって一時間は用意できるはずなんだ。……できない人がいるとすれば、それは用意したくない人だけだ」

小アリはらくがき帳から、机の中央へ歩いていった。男はコップの酒を飲みほした。

「それでも、なんとか明日の夜に会う約束をしたんだ。仕事が何時に終わるかわからないけど、終わったら連絡するよ、ということだね。あの人は変わらず淡々としていたけど、ぼくはやはり約束できたことがうれしくて、つい、おせっかいなことをしゃべってしまったんだよ。声に元気がない理由を聞いたらさあ、仕事が忙しくて疲れていると言うんだ。そこでだまっていればいいのに、ぼくは、『自分の選んだ仕事だろ？』と、説教くさいことを言ってしまった！ あとあと考えてみたらほんとによけいなことでね、『あんたにそんなこと言われたくない！』とでも言われそうなことをだよ。それでも、あの人は『はいはい』とかるく受け流してくれたんだ。……いや、受け流したのか？ わからない、ひよっとしたら、受けとる価値がないと思ったのかもしれない。そんな態度だったのかもしれない、ああ……、はつきりしないけど、一つだけはつきりしたことがあるんだ。電話を切るまぎわの口調がなげやりな丁寧語だったんだ！」

男はコップに日本酒をなみなみと注いだ。小アリは鉛筆を乗り越えて、折り置まれた京都のツーリストマップに近づいた。

「そのときの丁寧語、それがいくどもぼくを不安にさせて、会えな

いことを確信させたんだ」

男はコップの酒をぐいっと飲んだ。

「やっぱり、ぼくの勘は間違っていないかったんだ！……それとも、ぼくの解釈がそのように事を運ばせたのだろうか……、わからない。わかっているのは、明日はあの人に会えないということだけだ」

小アリはツーリストマップを登りはじめた。

「あの人からのメールの内容は、『ごめん……、じつは明日なんだけど……、さつき電話があつてさ、身内の人が交通事故で入院してね、明日の十九時にお見舞いに行くことになったの。……命には別状はないんだけどね……、ごめんね！ こんどこつちに来る用事があつたら連絡して。そのときにゆっくりと会おうね！』だつてさ。ねえ、きみ、どう思う？ ぼくはずるいと思つたよ！」

男は再びコップのなかの日本酒を飲んだ。

「ぼくは馬鹿だからね、必要のない、くだらない行為をしてしまうんだ。本当は断りのメールを受けとつたら、そこで終わりがよしなんだ。あの人に会えないという事実だけを素直に受けいれておしまいき。……ところが、ぼくはそのメールの文章を分析してしまった。（この“お見舞い”という予定はどんな思いで入力したのだろうか？ お見舞いに行くから悲しいのかな？ それともお見舞いに行けるからうれしいのかな？ そういえば、仕事が終わる時間がわからないのに、なぜ、“十九時”とはつきりとしたお見舞いの時間を教えてくれたのだろうか？ 会う時間がないことを示したかったのかな？ 一行目の“ごめん”と八行目の“ごめんね”はどんな意味がこめられているんだろう？ 一行目は言葉のおもみを前面にだして、も

うしわけない感情を表したかったのかもしれない。八行目は親しみとやさしさをこめるために“ね”をつけたのかもしれない。……ひよっとしたら、断りの文章を入力したことにほっとして、気が楽になったのかもしれない。……もしくは、わずかな罪悪感が表れたのかもかもしれない。それなら、最後の化粧されたこの数行は、気楽になつた心が生んだ、お互いにたいしての気休めじゃないだろうか？

“こんど”なんて言葉は、意志を持たない、いつあるかわからないあやふやな言葉じゃないか！）などと考えてしまった」

小アリはツーリストマップを周回していた。男はくずれたような顔を浮かべる。

「最悪さ！ もう最悪だよ！ なんで、こんなあら探しのようなことをするんだろう。……ほんと、自分がイヤになるよ。……でも、どうにもならない。気がついたらそんなことをしていたんだから。これはぼくの癖なんだ、むかしからぼくを混乱させてきた悪癖なんだ！ だってそうじゃないか、あら探するということは、相手を信用しているふりして、まるでしていないからなんだ。相手を心底信用していたらそんな行為はしようがない。猜疑心さいぎしん！ 悲観するまえにこの感情があらわれて、ぼくは無意識にあやつられた。だって、しようがないだろう……、会う約束をした直後から、あの人を疑っていたんだから……」

男はコップの酒を勢いよく飲みほした。小アリはツーリストマップの上に動きを止めていた。

「だから、ぼくも半分嘘のメールをかえしてやったんだ。『もちろんいいよ、そんな事情じゃしかたがないもんな。お大事にね！』つてさ。……まるで犬の糞だ！ どこにでもおちていそうな、吐きけをもよおす、胸糞むなくその悪くなる文章じゃないか！ 偽善者その者だよ

！……本当はこう送りたいかったんだ、『遠まわしの嘘と同情を使いやがって、イヤならイヤとはつきりと言いやがれ！このクソ女！』ってね。けれど……、そんな文章をおくる勇氣はどこにもないよ。やっぱり仮面をかぶってしまっただ」

男は日本酒の紙パックに手をかけ、勢いよくコップに注ぐとすると、水の動きに手を揺らされて、机に注がれた。男はあわてて紙パックをコップの口にむけた。小アリは速度をあげて机の端を歩く。男は気にせずコップに口を近づけた。

「それでもやっぱりあの人が好きなんだよ。猜疑心にかられたって、結局残るのは悲しみだけなんだ。……ほら、今日の朝、感情の重なりについて話しただろう？ 覚えているかい？ 今はとても単純だよ、悲しみだけが強く心をうちつけているんだから……」

小アリは歩く速度を緩めた。

「どんなに疑っても、あの人への想いは本物だから……、ぼくはあの人が心から好きなんだ。あの人がこの世に存在している、そう考えるだけで、ぼくは生まれてきたことに感謝してしまう」

男はコップを机の水たまりに置いた。

「そつだ、あの人のことを想うとかつと胸は熱くなり、ふやけて顔はほころぶんだ。そして、あの人の記憶をふりかえり、あの人の再会を空想しては、終わらないストーリーが回りだすんだ。色・形・動作は鮮明に描きだされ、二人の再会から始まり、たわいもない会話が再会の喜びをうつしだすんだ。古ぼけた蛍光灯がくすんだ店内を照らし、かすれたベージュ色の壁には、筆で書かれたおすすめの料理が貼られていて、栗色の薄いテーブルには汚れた醤油さし

と七味唐辛子、割り箸立てが置かれている。ぼくとあの人は向かいあって座り、運ばれてきた生ビールのジョッキグラスを手に持ち、品のない声が飛び交う店内で静かに乾杯する。ジョッキグラスは飲み口が凍るほど冷えていて、サーバーを洗浄していないせいか、それとも質が悪いからか、ビールはうすつぺらで酸味がつよい。いっしょに運ばれてきた白い小鉢には、洒落しやれつ気のない酢の物がちよこんと盛りつけられ、口をつけると、味の豊かさに思わず言葉をもらしてしまう。まわりはうるさくてがさつだけど、にぎやかで温かみがある。ぼくはあの人に『他の店に入ればよかったね』と笑いながら言うと、あの人は切れ長の眼を細くして、えくぼのある顔で笑いながら、『ほら、わたしの言ったとおりじゃん』と言う。するとふつくらしした中年の女性が料理を運んできて、威勢のよい声をあげて湯気をたてている皿をテーブルに置きはじめる。あの人は女性の声に反応してしまい、料理についてたずねると、ぶすつとした顔でざつくばらんに説明をはじめ。あの人は“とおし”の味について話すと、化粧の濃い女性はしわだらけの顔をゆがめたまま、はつらつとした声で得意げに話しつつづける。女性が機敏にテーブルを離れたところ、ぼくは女性のぶ厚い化粧について笑いながら話すと、あの人はもうしわけなさそうに笑いながら、『そんなこと言っちゃ失礼でしょ！ あの人も女性なのよ』と言う。

「場面はいろいろあってさ、洒落たカフェや薄暗い整然としたバー、エスニックな料理屋、もしくは外灯がさびしい公園などが登場して、会話の内容は場面によってさまざまだけど、いきつく先はいつも変わらない。ぼくがあの人に長々と思いを打ち明けるんだ」

男は不気味にはにかみながら小アリを見つめた。

「そのあとの展開はあまり描かなかった。現実はその甘いもんじやないからね、期待して痛い目にあわないためさ……、それに描く気

がなかったんだ。といつても、まったく描かなかったわけじゃない。最悪の事態を想定して、彼氏がいるところを描いてみたんだ。だって、じゅうぶんにあることだろう？」

男は小アリの前方にそつと右手をおいた。

「彼はあの人と同年代なんだ。……なんでだろう？ わりと若い男を想像してしまうんだ。まあ、男はなんだっていい、言っちゃえばべつに馬でもいいんだ。でね、ぼくはあの人の眼を凝視してありつたあの想いをつたえる。でも、あの人は『彼氏がいるから……』と困った顔をするんだ。ところが、ぼくはそんなことはまるでおかまいなしさ。だって、つきあっているだけじゃないか！ 前から思っていたけど、ぼくは“つきあい”という形式がよくわからないんだ。たまにいろいろだろうか？ つきあっている相手がそれほど好きじゃないのに、保険のように、あるいは同情によつてその関係を保っている男女がさ、それは“つきあい”という形式が生んだ、ある種の情性じゃないかと思うんだ。その人たちは、ただ“つきあっている”だけだろうね。でも、ぼくはそんな“つきあい”は知らないし、望まない。ぼくはあの人を愛している。それをあの人につたえる。それで、あの人かぼくを愛してくれたら幸いさ。それだけで物事はなりたつんだ。“つきあい”という形式なんてぼくにはまるで関係ない」

小アリは男の人差し指に乗った。男は手を顔の前に近づけた。

「あの人は“つきあい”に縛られている可能性がある、本当は愛してもいない男と一緒にいるのかもしれない。それなら、あの人の心は動く可能性がある。だからあの人に“つきあっている”人がいたら、ぼくはこう言おうと思っている。『結婚しよう！』とね」

男は真剣な眼つきで、にらむように小アリを見ている。

「そりゃ、結婚できる可能性はかぎりなくゼロにちかいだろっね。ほとんどの人があっけにとられると思うよ。でも、ゼロじゃない！可能性はあるんだから言う価値はある。なによりも、ぼくはあの人を愛しているし、一生をささげてもいいと思っっている。その言葉を言えるだけの権利は持つているんだ。きみは『長いこと会っていない、お互いのことをよく知らない、そんな人間と結婚するのはリスクがある』と思うかもしれない。ところが、お見合いで結婚する人もいれば、つきあつて一ヶ月で結婚する人もいる。もしかしたら、出会ったその日に結婚する人もいたかもしれない。結婚のしかたにきまりはないし、そもそも、結婚したいがリスクのある行為だと思わないかい？ それに相性が悪ければ別れるだけだし、良ければべつうまくいく。習慣が二人をよりよく結びつけてくれるからね」

男は机に手をおろし、小アリが降りるのを待った。

「けれど、毎晩ぼくの眠りをさまたげていた空想は、現実に行きわたることはない……、明日、ぼくはあの人に会うことはないのだから」

小アリは小指の根元から机に降りて、触覚をリズムよく動かし、歩きはじめた。

「ぼくはどうなるのだろう？ ぼくのこの気持ちはどうなってしまうのだろう？ 行き場のないこの感情は貧弱な胸にとどまり、体中のエネルギーを吸っては、からみつくように燃え続けるのだろうか？ 感情の炎は頭に飛び火して、日中夜、ありもしない空想を生みだしつつけるのだろうか？ ああ……」

男は頭を横に二三度大きく振った。

「もう耐えられない！ 空想は心底から楽しいけど、ぼくの心をすっかり削ってしまった。あの人に会えると思っていたんだ。よりかんだかい、歌うような音が出るようにと、松脂まつやにをたっぷりと弓に塗りと激しく擦りこすすぎてしまった。張りつめていた高音の弦はぷつりと切れてしまい、音を鳴らすことはできなくなった。ありもしない弦では音一つ生みだすことができず、残った低音の弦では、もの悲しい空想が生みだされるだけだ」

男はコップの飲み物をいっきに飲みほして、乱暴に机に置いた。小アリは歩みを速めた。

「あの人に電話しよう！ そしてこの想いをつたえよう！ ぼくはもう待てない！ 待つてばかりいたのではなにも始まらない。……それに、人はいつ死ぬかわからないんだ！ もしかしたら、明日、ぼくは布団のなかで目覚めることがないかもしれない。……ぼくが働いていた職場の同僚は、そんな終わりを遂げたんだ。ぼくだっていつそうなるかわかったもんじゃありません！ そうなったらぼくは、ぼくの、この……、あの人への想いはどうなってしまうんだ？ 目的をはたすことなく、ぼくと一緒に消えうせてしまうのか？ それは嫌だ！ それでは、この世に生みだされた純粋な気持ちは、どうにもうかばれないじゃないか。ぼくは、あの人への想いにたいして、もうしわけないことをしてしまうことになる。感情を活かす機会をあたえず、後悔の念を背負ったまま、深遠な意識にとりこまれてしまっではないか！」

男は携帯電話を手に取り、眼をぎらつかせたまま部屋をとびだしていった。小アリは机の上の水滴に近づき、触覚を動かしていた。

四

夜は深まっていく。乾いた空気はさらに低くただよい、灯が点きつぱなしの部屋は、虫の音がどこからか幻聴のように響き、忘れ去られたように静かだった。

突然部屋のドアが開かれ、アルミ缶を手に持った男がふらふらと入ってきた。イスにどつと腰かけると、皮膚が硬直したような面のまま、障子のはるか先を見つめた。男は机に両肘をつき、視線を二度三度変え、再び一点を見つめた。

「ああ、アリさん、聞いてくれよ、ぼくは行動した、行動したんだ……、あの人に告白する場面を千回は描いたのに、現実はなに一つ行われていなかった……、ぼくはそれを本当は知っていた。だから行動したんだよ……、ねえ、どんな結果になったと思う？ ぼくはね、自分自身がこれほどまで卑屈で、小さい存在だとは思ってもみなかった。空想の中の自分は自信にあふれていて、あの人への思いがまるで崇高な、絶対の正義をもったもののように、ぼくは傲慢ともいえる態度で、はつきりと自分の想いをつたえていたんだ。ところが、そんな自分のかけらも存在していなかった。頭の中は空白になり、言葉は流れることを知らず、自分が何をしているのかわからなくなってしまうた。おもわず、携帯をほうり投げてしまおうかと思った。……それでも、とぎれとぎれながら、自分の素直な気持ちをつたえたよ」

「道路上で話すのがなんとなく気恥ずかしくて、探した公園の奥す

みで、気持ちをやわらげるように歩きながらね。いや、がんばった
と思うよ、酒の力を借りていたとはいえ、じつさいに行動したんだ
から……、でも、あの人は、まるで人ごとのように、さほど驚いた
様子をあらわすことなく、『へー……、そうだったんだ……』と受
け流した。まるで、おぼれている小動物がもがいているすがたを、
同情してながめているかのように、哀れには思ってはいるが感情は
さほど動かされていないようだった。（かわいそうだけどしかた
がない）あきらめてなに一つ行動にうつさないように。『わたしに
は好きな人がいるんだ』とでも言うてくれればまだよかったのに……、
……、会話はとぎれて、自分の想いは放置されてしまった。結果は推
測できたんだから、気をきかせて男らしく電話を切れればよかったの
に……、居場所がなくなり、混乱してじっとしていることがばつ
悪いことのように、必要がないことをする愚劣な人間になってしま
った。『彼氏はあるの？』と、むだなことをたずねてしまった！
そんなことを聞いてもどうにもならないのに……、わざわざ自分を
みじめにする材料を提供するように差しむけてしまったんだ！」

「あの人は静かに返事をした。……それだけならまだましたが、そ
れを聞いて、ぼくは思わず声をだして笑ってしまった！ 本性が現
れたんだ！ 仮面が顔にはりつき、醜い笑い声をあげて自分をさら
に汚してしまった！ ……あの人は一言も笑い声をあげなかった。
それに気がついて、ぼくははっと我をとりもどし、だまってしまった。
た。（なんて侮辱をしてしまったんだ！）と背筋がぞくぞくして、
身動きできなくなりました。……そうしたら、あの人は言うてく
れた、『ごめんね、約束したのに会うことができなくて……』と……
……、ぼくはやりきれなくなり、おもわず電話を切ってしまった」

男はアルミ缶の液体を口に入れた。

「もう、悲しくて悲しくて……、自分が情けなくて、自分のうすっ

ぺらな仮面が心底から憎くて……、でも、涙はでないんだよ！ 胸はわけのわからないものがうずまいて、くそつたれなのに！ ……それでも、あの人を想うと、やっぱりあの人が好きなんだよ。…だって、あの方は言ってくれた、“会うことができなくてごめんね”、と、けっして、“好きな人がいてごめん”とは言わなかった。それだけが、ぼくの心を救ってくれた。ぼくを見下したりせず、一人の人間として、対等にあつてくれた。あの方は、正直な人だったんだよ！」

「ねえ、小アリさん、あんたは自分が“自分”じゃないと疑ったことがあるかい？ あんたはないだろう……、だって、しょせんアリだからね。自分がいる場所を知ることではなく、自分の歩いてきた道をふりかえることもなく、自分がしている行動すら疑問をいだくことはないんだからね。けれど、ぼくは自分が“自分”じゃないような気がするときがある。一緒にいたくない人の前でも平然と笑い、悲しいことがあるのに冷静なふりをして、泣きたいのに涙は流れることなく、腹から笑い声をあげてしまう。（自分は嘘をつきすぎて自分というものが失ってしまったのではないだろうか？）日頃、そんなことを思うことがあった。……だから、あの人への想いも、本当の自分の気持ちと信じることができなかった。長いあいだ偽いつわってきたせいで、恋愛感情を、人間らしさを、すっかり失ってしまったのではないかと、不安にかられることがあった」

「だからあの人に会って確かめたかったんだ！ ぼくのこの体と心には、しっかりとした人間である証拠が息づいていて、正常につながっているのかを確認したかったんだ！ ぼくは本当にあの人が好きなのかわからないんだ！ だって、三年間あの人には会っていないんだよ！（ぼくの中のあの方は三年前の姿のままにいるけど、本当のあの人かわかったもんじゃない！ 年月があの人をつごうよく変えことに気がつかないだけであって、ぼく自身が創り出した幻

想に恋をしているんじゃないか？ それでは、ぼくはいつたい誰に恋をしているんだ？ 実体のない、あの人の亡霊に恋をしているんじゃないか？）そう考えたら、言いあらわせない恐怖におそわれた」

「（ぼくはいつたい何を見ているんだろう？ ぼくの見ている世界は本当に存在するのだろうか？ そもそも、ぼく自身が正しく存在しているのだろうか？ そんなことを考えだしたら、なにかしらの確証をえないと、自分がぼやけていくばかりだった。だから、ぼくの心を埋めつくしている感情、それをはつきりさせる必要があると思った。（自分を偽って恋心を楽しんでいるだけなのか？ それとも純粹な、真実の感情なのだろうか？ その答えは今のあの人に会えばわかる。あの人の前に立てば、ぼくの感情が真実か偽りかぼく自身が教えてくれる そう考えたんだ」

「それなのに待てなかった。……あの人への恋心がぼくの胸と頭を炎々と焼き、我慢することができなかった。もう耐えることができず、はやく、この感情にけりをつけて、一刻もはやく逃れたかった。今のあの人に恋しているのか、それともあの人の亡霊に恋をしているのか、そんなことはどうでもよくなってしまった！ だって、ぼくの胸は、生命力を持った感情がたえず焦がしつづけていた。それはまぎれもない事実なんだ！」

「……いや、それも確かなのかわからない。ぼくは本当に、感情に耐えられなかったただけなのだろうか？ それを言いわけにして、自分の行動を正当化しているだけではないだろうか？ そんな気もしてくる……、わからない。なにしろ、あの人に会って自分を確かめることができない。ぼくは、あの人への、亡霊への恋心を、亡霊ではないあの人につたえてしまった！ はやまった行動ではないだろうか？ 電話でいつたい何がつたえられるというんだ？ 実際に会ってみたいとわからないのに……、なぜ電話してしまっただ？」

「やはり、耐えられなかったんだろう。……いや、そもそも、今のあの人に想いをつたえる必要があったのだろうか？ ないだろうな、けっしてないだろう……、いや、あったんだ！ ぼくは欲しかったんだ！ あの人の新しい記憶が……、なんでだ！ なんで我慢がでしなかつたんだ！ あの人の思い出をとどきふりかえり、ひっそりと楽しむだけでとどめておけばよかったものを……、なぜ我慢できなかったんだ？ 環境か？ あの人を手に入れることができる、時間によゆうのある今の環境か？ それとも、あの人が欲しくてぼくはこの環境を望んだのか？ わからない！ そんなことはわからない。……さてよ、もしかしたら、正直に行動していたのかもしれない、（あの人が欲しい！）欲求を隠すようになにかしらの理由で化粧をして、自分を偽りつつも、正直に行動していたのかもしいれない！ けれど、もし恋心そのものが偽りだったら？ ぼくはいつたいなにをしているんだ？ ……やつぱり、幻影に動かされていないのだろう。ぼくは、虚妄きやもうにとらわれた、あさましい動物ではないだろうか？ わからない！ もう、なにが真実なのかわからない！」

男はアルミ缶の中身を一気に飲み干した。

「それでも、あの人を想うとさびしくなる、……あの人を想うとうれしくなる、……あの人を想うとあたたかい気持ちになる、あの人を想うと晴れやかな気分になる、あの人を想うと踊りだしたくなる！ あの人を想うと敬虔けいけんな心持ちになる、あの人を想うと愛しくなる。でも……、あの人を想うと泣きたくなる！ くそ、なんでだ！ なんてなんだ！」

男はアルミ缶を握りつぶし、テレビめがけて投げつけた。缶はテレビ台にぶつかって、薄っぺらい音をたてて畳に落ちた。

「ああ、この胸の嘆きは偽りだろうか？ もし、偽りなら、なぜこれほどまでに胸をかきみだすんだ？ ああ、ぼくが偽りなら、これほどまでに苦しむことはないだろうに……、それとも、この苦しみが仮面をかぶった憐憫なのだろうか？ それほどまで自分を憐れみたいのか？ それほどまでに自分を卑屈に偽りたいのか？ すでに、正直で純粋な自分は存在していないのか？ あああ……、もう……、ぼくは考えたくない、なにも考えたくない！ この頭を切りおとし、気味の悪いうす笑いをうかべた頭部につけ替えて、分別のないひきつつた笑い声をあげたまま、スタツカートのきいた陽気な音楽にあわせてカタカタと動くだけでいい！ それで満足だ！」

男は目を閉じて、口を半開きにしたまま頭を振る。

「ぼくはもう考えない！ 考えたってしかたがない！ それに事はもう済んだんだ。ぼくの恋心が偽りかだって？ もうそんなことは考えない！ そんなのはどうだっていい！ ぼくはあの人を想えば楽しめるんだ！ あの人が亡霊だろうと、亡霊以外のなにものだろうと知ったこつちゃない！」

男は日本酒のパックに手を伸ばし、口に近づけてどぼどぼと流しこんだ。

「ねえ、アリさん、あんたは聞いているかい？ ぼくの話を一言ももらさずに、その小さな粒の頭にしまっているかい？ ねえ、あんた、すべての“もの”には役目があるのを知っているかい？ なんて物質は存在すると思う？ ぼくは以前、イランにいた時に気がついたんだ。“もの”が存在するのは、その“もの”が、“なに”かしらに必要だからだ。もっとも、なにかの格闘漫画にも、同様なことが書かれていたけどね」

「じゃあ、いつたい“なに”が必要としていると思う？ 目のまえにある酒が今のぼくに必要とされるように、あなたの仲間はある必要とするからさ。あなたがたくさんいるからこそ、あなたの種はなりたち、その種族は存在できるんだ。それはあなたの思惑を残酷なまでに気にもしない。だからこそ、あなたはこの世に存在しているし、ぼくの目の前の酒も存在している。この机も、このボールペンも、空気も、光も、あの人への想いもそうなんだ。結局は“なに”かに望まれ、必要とされているから存在しているに過ぎないんだ。それは神様と名をつけられた存在が必要としているかもしれない。いや、ぼくの存在はもしかしたら、その神様という名の存在を包括している、さらに上位の存在が必要としているのかもしれない。もしかしたら、その存在がぼくを必要としなくなった瞬間 ぼくの役目を終えた に、ぼくの存在はこの世から消えてしまうかもしれない……」

「けれど、ぼくは今存在しているし、あの人への想いも存在している。それに、ぼくはあなたの存在を必要としている……、だから、あなたに役目をあたえるよ。巢に戻ったら、ほかの仲間にごう伝えしておくね。『ちつばけな一人の人間が、許容できない能力の強さに苦悩して嫌悪しつつも、その能力に愛着を抱いていた。わたし達には、その人間の持つ能力に妬みつつも、そんな能力のないことを喜ばしく思い、自分達がアリだということに誇りを持って、自らの生をまっすぐにまっとうしよう！』と自覚させるんだ。……ねえ、そう思えば、ぼくがきみに話をするにも、意味を持つと思わない？ それなら、ぼくがきみに話すのも許されると思わない？ まあ、きみにとってはどうでもいいことだろうけど……」

「そういえば、きみは映画を観ることがあるかい？ けっしてないだろうね。だから、ぼくが説明するよ むかし高校生の時にさ、同級生の女の子に誘われて映画を観にいったことがあるんだ。ぼく

はなんで映画に誘われたか考えもせず、自分がへまを起こさないようにすると、時間が経つことばかりを気にしていたんだ。その時に観たのが、トム・ハンクス主演の『キャスト・アウェイ』という映画で、旅客機が墜落し、ある男が無人島に流れ着いて、長年一人で生活する話なのさ。結果、その男は助けられて文明社会に戻ることになるんだけど、一人で過ごす無人島の生活が、とても印象的だったんだ。特にその男が、いっしょに流れ着いたバレーボールにマジックで顔を描き、いくども話しかけるシーンがね。……ぼくは、今はその男の気持ちがすこしわかる気がする。もちろん、その男とおなじ立場じゃないから、すべて理解できるわけじゃないけど……、人は誰かに話しかけて、自分をなくさめないと生きていけないと思うんだ。だれかしらとつながっていないと、はげぐちがみつからず、いずれ頭がパンクしてしまう」

「それでも、ぼくはあの人への想いを誰にも打ち明けたくなかった！ 打ち明けてしまえば、純粹なあの人への想いは、求めてもいない意見の強要と、まとはず的外れな解答に汚されてしまい、処女性を失ってまるつきり別のものになってしまうから。多くの人は深い思慮にふけることなく、自分の概念にもとづいて安易な意見を述べる。もしくは、自分の理解を得られないことに眼をそらし、ひげ卑下しては嘲笑するんだ。“できた”人間ならそんなことはしないけど、あいにく、ぼくのまわりにはそんな人間はいやしない。……ぼくはあの人への想いを、なによりも大切にあつかいたかった。なんでもかんでも人に打ち明けて相談すればいいわけじゃない、本当に大切なことは、身に静かにひそめておくべきなんだ。……それでも、ぼくは映画の男ではないけれど、やはり人間なんだ。だれかに打ち明けたい欲求にかられるし、そうしないと身が滅びてしまう」

男は背もたれによりかかり、宙を眺めた。

「ああ、さようなら小アリさん……、もう……、ぼくはあなたには話しかけない。すでにその必要がなくなったから。もう、話すことなんて残っていないんだ。すでに空っぽさ。頭も、この胸にも、なら残っていない。もう、全部吐きだされてしまった……、だからもう、ぼくの前にはすがたを現さないでくれ……、けっしてその小さい体を現さないでくれ。冬への準備は済んだだろう？ ぼくとちがって頭を使うことなく、たえず体を動かしていただろう？ ぼくはそれを知っている、なんどもそのすがたをみかけた。……だから、けっしてぼくの前にすがたを現さないでくれ！ ぼくはもう話すことがないんだ！ きみが目の前に現れてしまったら、ぼくはあけたくもない扉を開き、きみにお話するのかい？ やめてくれ！ 傷をかきむしるようなことはしないでくれ！ お願いだから、ぼくの前にその美しい体を現さないでくれ……、でないと、ぼくは……、つぶしてしまうかもしれない。ぼくは、きみの、せんさい繊細で複雑なその体を押しつぶすかもしれない！ そんなことはしたくないんだよ。……それに、……きみもそんな終わりを遂げたくないだろう？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9572o/>

蟻との会話

2010年11月21日06時37分発行